

## 「秋に観たい広重の名所絵と俳句その一」



歌川広重『名所江戸百景』 九十九. 両国花火 より

めぐり来る季節に合う名画と俳句、第六回目は前回に続き歌川広重（うたがわ ひろしげ）（1797-1858）の『名所江戸百景』から秋に観たい作品と俳句その一です。

美人画や役者絵では人気が出なかった広重。

しかし、ドイツ・ベルリンで生まれた「ペロ藍」と呼ばれたペルシアンブルーとの出会いが彼の運命を変えます。

木版画の特質をよく理解していた広重は、油彩より鮮やかな発色ができ、後に「広重ブルー」と呼ばれる紺青（ぐんじょう）の表現を名所絵に取り入れます。

また、「カメラマンの目」を持つ絵師といわれ、「スマホの目線」と「ドローンの目線」を駆使した大胆な構図の作品と、「七夕」「花火」「西瓜」などこの季語が秋に分類されるのかという以外さを含め、今回は「秋に観たい広重の名所絵その一」五点を選びました。

俳句とともに楽しみ下さい。

# 1. 市中繁栄七夕祭 (しちゅうはんえいたなばたまつり)

『名所江戸百景』七十四



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100\\_views\\_edo\\_073.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_073.jpg)

七十四. 市中繁栄七夕祭 | 安政四年 (1857年) 七月

七夕は陰暦七月七日の夕方の意味で、五節句の一つです。  
この日、天の川をはさんで逢う牽牛星（けんぎゅうせい、鷲座の首星アルタイル）と織姫星（おりひめぼし、琴座の首星ベガ）を祭る古代中国の伝説にもとづく行事です。

江戸では七夕の前日にあたる七月六日未明から物干し台などに青竹が立てられ、色とりどりの飾り物が結びつけられました。

図でも青竹が空高く掲げられていて、短冊や色紙をはじめさまざまな飾り物が風になびく様子が見えます。

左手前の青竹には杯（さかずき）と瓢箪（ひょうたん）が飾られており、酒好きの広重の遊び心が見えます。

まわりの青竹には大福帳、そろばん、千両箱、西瓜の切口、金魚など思い思いの紙細工が飾られています。

シリーズ中唯一場所名がなく市中とあります。

しかし、江戸城や富士山の位置を考えると、京橋付近から描いたものと推定され、広重の自宅物干し場からの眺めという説が有力です。

安政の大地震から復興したことを祝う気持ちが自宅からの景色とさせたのでしょうか。

右下に干された浴衣も広重本人のものと考えられています。

手前の屋根瓦にほどこされた雲母摺（きらずり）は図にアクセントを与えています。

ここでは初秋の季語「七夕」を詠んだ句を選びました。

## うれしさや七夕竹の中を行く

正岡子規（まさおか しき）（1867-1902）

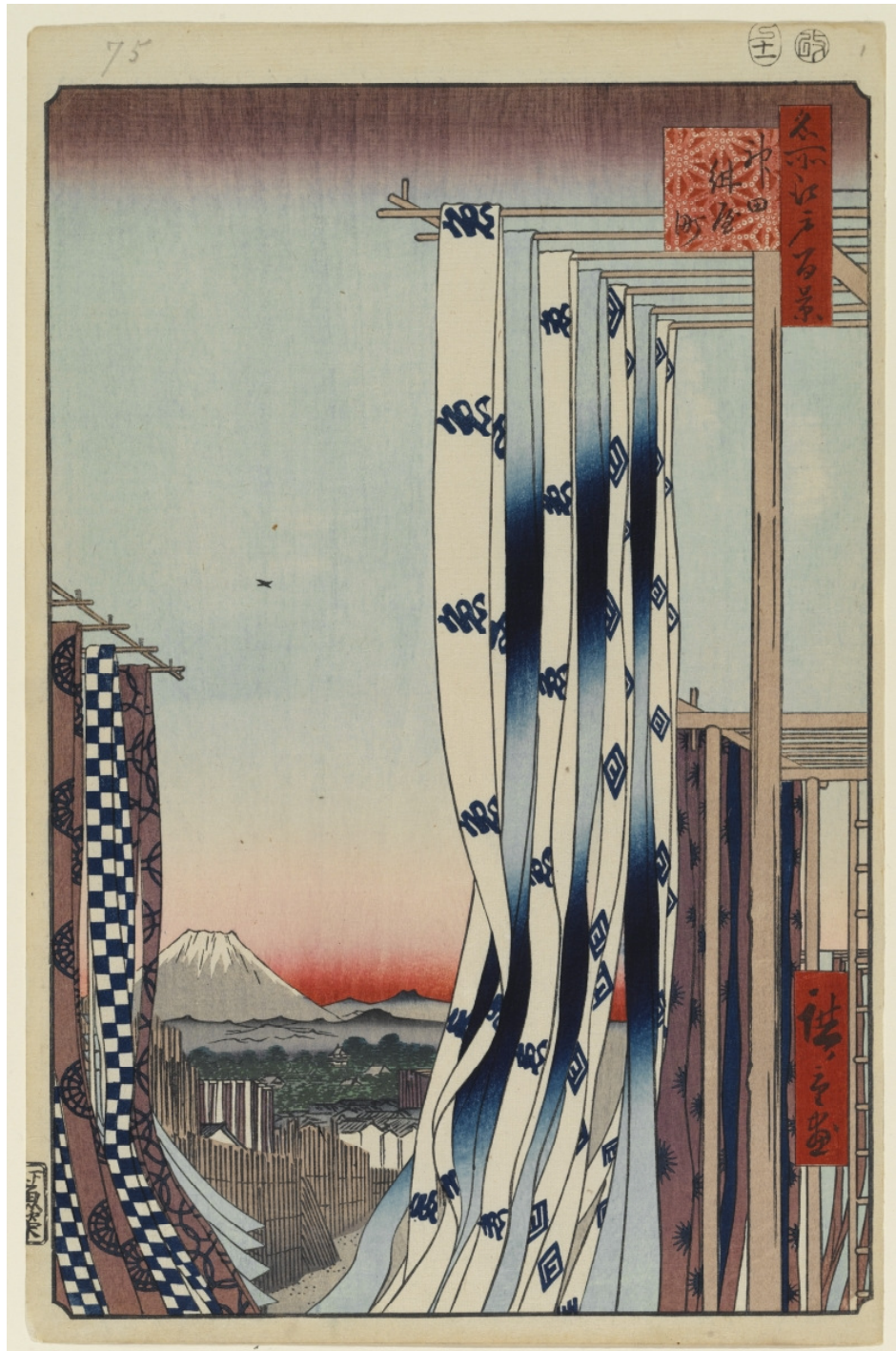
## 牽牛織女文字間違へてそよぎをり（牽牛織女=けんぎゅうしよくじょ）

川崎展宏（かわさき てんこう）（1927-2009）



## 2. 神田紺屋町 (かんだこんやちょう)

『名所江戸百景』七十六



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige\\_Le\\_quartier\\_des\\_teinturiers\\_de\\_Kanda.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige_Le_quartier_des_teinturiers_de_Kanda.jpg)

七十六. 神田紺屋町 | 安政四年 (1857年) 十一月

紺や葡萄茶（えびちゃ）に染めあげた布地が風にゆらゆら揺れていて、その向こうには江戸城と富士山が見えます。

布地をよく見ると「魚」の字と「ヒ」と「ロ」の文様があります。

「魚」は絵師、彫師、摺師を統括して作品を制作し、販売する板元（版元）の魚屋栄吉を、「ヒロ」は広重の「ヒロ」を菱形に象（かたど）った意匠です。

ちゃっかりとこの作品の宣伝をしています。

神田紺屋町は当時幕府から藍の買い付けを許された紺屋頭の土屋五郎右衛門が支配していた町で、染め物職人が多く住んでいたことから、紺屋町と呼ばれていました。

町内には藍染川が流れ、ここで染め物を洗い流し、干場で乾かしました。

近景の間から遠景を見せる構図は葛飾北斎もよく使っていた手法で、広重が北斎を意識してこの作品を描いたのかも知れません。

ここでは「染物」と秋の季語「砧」と「刈安」で詠まれた句を選びました。

**砧ひとり能き染物の匂ひかな**（砧＝きぬた、洗った布を生乾きの状態で台にのせ、棒や槌でたたいて柔らかしたり、皺をのばすための道具。能き＝よき。）  
濱田酒堂（はまだ しゃどう）（生年不詳-1737）

**刈安を背負ひてきたる染物師**（刈安＝かりやす、ススキ属の植物。この草で染め物をした刈安色は日本の伝統色の一つで黄色染に用いられ、色が落ちにくく、藍色と併用して鮮やかな緑を作ることができました。）

瀧澤伊代次（たきざわ いよじ）（1925-2010）

### 3. 高輪うしまち (たかなわうしまち)

『名所江戸百景』八十二



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100\\_views\\_edo\\_081.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_081.jpg)

八十二. 高輪うしまち | 安政四年 (1857年) 四月



虹がかかっていることから、雨あがりの光景でしょう。  
地面や虹、天上に一字ぼかしによる雲母摺が用いられ、キラキラと輝いています。

大八車の大きな車輪、空には見事な虹、さらには車輪の左手には無造作に捨てられた西瓜の皮が相似形の円の一部として配置された構図が巧みです。

大八車の陰ではかわいらしい子犬が使い古されたわらじをくわえて戯れています。

牛町は、増上寺安国殿の建立にあたり、資材運搬を命じられた牛持人足が拠点とした場所です。彼らはその後も江戸城の堀の拡張や江戸湾の埋め立てに加わり、この地に定住しました。西瓜は力仕事をした人足の喉を潤したもののなのでしょう。活気ある江戸の日常の一コマです。

遠景に見えるのは、嘉永六年（1853年）のペリー来航により急遽築かれた砲台がある台場です。

ここでは初秋の季語「西瓜」を詠んだ句を選びました。

## 正直ね段ぶつつけ書きの西瓜かな

小林一茶（こばやし いっさ）（1763-1828）

## 晩年も西瓜の種を吐きちらす

八木忠栄（やぎ ちゅうえい）（1941-）

# 4. 四ツ谷内藤新宿 (よつやないとうしんじゆく)

『名所江戸百景』八十七



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100\\_views\\_edo\\_086.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_086.jpg)  
 八十七. 四ツ谷内藤新宿 | 安政四年 (1857年) 十一月



画面の約半分を使って描かれているのは、極端にクローズアップされた馬の尻と脚。そして馬の脚元に点々ところがついているのは馬糞です。脚の数を確認してみると七本で馬方の脚が二本なのでこの馬方に引かれる馬は二頭になります。画面左上に立ち並ぶのは五街道の一つ、甲州街道の一番目の宿場町である内藤新宿の町並みです。

江戸時代の馬と牛の分布を見ると、若狭湾と伊勢湾を結ぶ線から東は馬、西は牛が多かったようです。西日本では荷を運ぶのは牛車でしたが、東日本では馬が主でした。

内藤新宿は元禄十一年（1698年）、高遠藩内藤家（たかとうはんないとうけ）の下屋敷を町家としたので内藤新宿の名があります。

『名所江戸百景』は独創的な構図が多くそれが魅力の一つです。この作品は手前の馬の脚から左の宿場奥への距離感が、いわゆる「スマホ視線」で構成されています。シリーズの中でも強い印象を残す作品です。

ここでは「馬」+秋の季語「虱（しらみ）」「野分（のわき）」で詠まれた句を選びました。

蚤虱馬が尿する枕もと（蚤＝のみ、夏の季語）（虱＝しらみ）（尿する＝しとする）

『奥の細道』の途上、尿前（しとまえ）の関にさしかかった時の句です。

松尾芭蕉（まつお ばしょう）（1649-1694）

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな（野分＝のわき）

与謝蕪村（よさ ぶそん）（1716-1784）

## 5. 両国花火 (りょうごくはなび)

『名所江戸百景』九十九



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100\\_views\\_edo\\_047.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_047.jpg)

九十九. 両国花火 | 安政五年 (1858年) 八月

夜空に大きな花火が打ちあがり、その光が川面を照らしています。  
放物線を描いて落ちていく花火の玉の表現も印象的です。  
このシリーズの中でも一、二の人気がある両国の花火を取りあげた作品です。

両国では旧暦五月二十八日の川開きから三ヶ月間が納涼の期間で、花火は五月二十八日の川開き、七月十日、八月二十八日の川仕舞いに打ちあげていました。  
この作品が目録では秋に分類されていることから八月二十八日の川仕舞いの景色と考えられます。  
花火の打ちあげは両国橋の上流を玉屋が、下流を鍵屋が担当しており、両国橋越しに左岸を望む本図の花火は鍵屋のものであります。

両国橋周辺では見物客がぎっしりで「たまやー」「かぎやー」の音が聞こえてきそうです。  
川に浮かぶ船の中でひととき大きく提灯（ちょうちん）を五つ掲げたものは屋形船と呼ばれます。  
屋根のついたそれより小型の船を屋根船、舳先（へさき）に行灯（あんどん）を置いているのは飲食物を売る煮売船です。

右上を白ぬきにして花火の明るさを強調しています。  
川岸に雲母摺（きらずり）がほどこされているのも花火の風景をひき立てています。  
この作品はドローン目線で描かれています。

ここでは初秋の季語「花火」を詠んだ句を選びました。

## 舟々や花火の夜にも花火売

小林一茶（こばやし いっさ）（1763-1828）

## 暗く暑く大群衆と花火待つ

西東三鬼（さいとう さんき）（1900-1962）



私も詠んでみました。

## ひとり酔ふわれにさみしき遠花火

白井芳雄

今回は「秋に観たい広重の名所絵と俳句その一」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：小池満紀子・池田芙美著  
『広重 TOKYO：名所江戸百景』（講談社）（2017 年）  
ISBN978-4-06-220507-8

太田記念美術館監修 日野原健司・渡邊晃文  
『広重 名所江戸百景』（美術出版社）（2017 年）  
ISBN978-4-568-10495-0 C3070

安村敏信監修  
『広重「名所江戸百景」の旅 あの名作はどこから描かれたのか？』（平凡社）（2014 年）  
ISBN978-4-582-94568-3

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修  
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）  
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）  
ISBN4-04-621032-X C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 [melmaga@tic-co.com](mailto:melmaga@tic-co.com) まで、  
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : [info@tic-co.com](mailto:info@tic-co.com)